



## 食の安全

一般財団法人 消費科学センター 代表理事 大木 美智子  
国立研究開発法人農業環境技術研究所 評価委員



今

年の夏は本当に暑い夏でした。連日の猛暑に、誰もが地球温暖化は確かに進みつつあることを信じさせられたのではないでしょか。その影響で野菜の品不足が報じられました。スーパーなどの売り場には、見た所ふだんの食生活に不自由がないように豊富に野菜が並んでいましたが、値札を見ると思わずエーッと叫びたくなるほどの高値で、買うか買うまいか迷ってしまうほどでした。この先温暖化・異常気象の多発が続いたら、高値どころか売り場から消えてしまう品も出てくるのでしょうか。

毎年、春秋の彼岸には栃木県にある夫の実家の墓参に行くことっています。実家といつても既に両親は他界し、百年を超えた古い家も取り壊して跡地と畠と墓地の世話を親しい隣家に頼んであるわけで、墓参りの後はそのお宅でビールと昼飯を頂きながら歓談するのが常となっています。今は合併して町となっていますが、中山間地のこの山村を初めて訪れてから五十年余になります。実家の前にあった小学校は既に廃校となっており、高齢化・過疎化が進んで今はこの集落の何軒もの家が無人となっているようです。昔は見事だった棚田や畠が、今はその多くが雑草に覆われており、聞けば猪に荒らされるばかりなので耕作を諦めたとのこと、ここでも今年の暑さが話題になりました。ナスはほぼ全滅、米は昨年に比べて味が劣るなどなど、気候変動が農業に及ぼす影響と、農村の荒廃を思い合せて先行き心配になりました。

食の安全というと、一般的には食べて害はないかという食べ物の質の安全のことを考えると思いますが、もう一つ、食べ物の量の安全、つまり食べ物が十分手

に入るかどうか、栄養失調や飢え死にしないですかという安全についても考える必要があります。日本の食料自給率は先進国の中で最も低く、食料の6割以上を輸入に頼っているのが現状です。一方で世界の食料需給事情は年々厳しくなっており、いつまでも安易に輸入できると考えるのは危険です。環境の変動に対応できる持続的な農業を実現し、農業生産力を上げることが必要です。

食の安全の確保は一般の消費者にとっても重要な問題ですが、農業環境技術研究所がこの食の安全の質と量のどちらの面でも重要な働きをしていることは残念ながらあまり知られていないように思います。研究所の広報物やホームページを見たりすれば、農作物の放射性物質や農薬・化学物質汚染の研究、温暖化対策の研究など、貢献していることがわかるのですが、研究所の名前を聞いただけでは農村や農家の環境問題を研究する所、都市住民の非農家の自分には関係ないと考えられてしまうのではないかでしょうか。広報活動は色々と工夫・努力されているようですが、私としても微力ながら折あるごとに農環研の重要性・必要性を多くの人に知らせたいと思っております。なお、私は女性研究員の活用という点でも農環研を高く評価しています。仕事・子育てを両立しやすい雇用環境の整備など手厚い支援をしており、女性研究員の比率も現在の14%を2020年には30%にする目標のこと、目標達成を祈ると共に研究所が食の安全を守るためにさらなる成果を挙げられることを期待しています。